

令和元年6月6日現在

機関番号：34419

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K21510

研究課題名(和文) アイヌ言語教授法の確立ーマオリ語復興運動を参考に

研究課題名(英文) Establishing an Ainu Language Pedagogy - Learning from Maori Language Revitalization Movement

研究代表者

岡崎 享恭 (OKAZAKI, Takayuki)

近畿大学・国際学部・准教授

研究者番号：80535774

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、マオリ語復興運動におけるマオリ語教育システムの成立過程ならびに現状を分析するとともに、マオリ語教育者を招聘しワークショップを集中的に行うことで、テ・アタランギ(成人へのマオリ語教育)教授法を元にしたアイヌ語教授法の確立を目指した。マオリ語復興に関しては、マオリ語保育園から成人教育まで、自民族や部族、地域や話者コミュニティにとって相応しい独自の教育を施そうとする意識が、教育システム確立や現在も続く変革に影響を与えていることが明らかになった。アイヌ語教育において、テ・アタランギ式の教授法初級レベルの詳細な授業計画を開発するとともに、それを補助する種々のアクティビティを開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義  
より複雑化するマオリ語復興の動き、マオリ語教育の取り組みに関する知見が深まったことは、本研究成果の意義として挙げられる。また、アイヌ語だけで行うテ・アタランギ式教授法初級レベルの授業計画、ならびにそれを補助する種々のアクティビティを開発できたことも意義深いと考える。さらにアイヌ語関係者とマオリ語関係者が、言語復興やその他の個人や民族の取り組みに関して知見を共有し合えたことも意義として挙げられる。

研究成果の概要(英文)：Through this research the process of establishing a Maori language education system under Maori language revitalization movement as well as the current situation was analyzed in order to consider how to establish an Ainu language teaching method based on the Maori Te Ataarangi method. It became apparent that the willingness to offer a unique education appropriate to a people, tribe, region or speaker community greatly impacted the establishment of the education system as well as its ever-evolving transformation. In terms of Ainu language education, detailed beginner level lesson plans based on Te Ataarangi as well as various supplementary activities were developed.

研究分野：言語復興

キーワード：言語教育 先住民族教育

## 1. 研究開始当初の背景

2007年採択された「先住民族の権利に関する国際連合宣言」には、第13条、14条において、「母語を再活性化する権利」、「母語による民族教育を受ける権利」など、先住民族の言語や教育に関する権利を有することが謳われており、その回復が検討されてきた。日本でも2008年「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が国会両院で採択され、その後の「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会」や「アイヌ政策推進会議」が新法の議論を進める等、アイヌ民族の言語、文化、社会的状況など、先住民族としての位置づけに国内外の注目が集まっていた。

世界の消滅危機言語の殆どが先住民族の言語である中で、ニュージーランドのマオリは、危機言語状況にあったマオリ語を復興させるため、いち早く取り組んだ成功例として語られる。1970年代、危機感を持ったマオリ語教育者や年長者らが全国から集い、サイレントウェイと呼ばれる言語教授法をマオリの価値観・世界観に当てはめて、テ・アタランギ教授法を作り上げた。そのプロセスでは、各地の方言差についての話し合いを繰り返し、一定のコンセンサスを得て、教えるべき最低限の文法と語彙を決定した。このテ・アタランギ教授法で、英語で育った大人たちはマオリ語のみのイメージ教育を受け、マオリ語を流暢に話せるようになった。さらに1980年代初頭より始まったコーハンガ・レオ(言語の巣)と呼ばれるマオリ語保育園からワーナンガと呼ばれるマオリ大学まで、すべての教育をマオリ語で受けることのできる教育システムを構築した。2015年現在、マオリ語話者は15万人を超えと言われていた。

過去40年にわたりマオリ語復興に関わってこられたテ・アタランギ教授法の専門家は、アイヌ民族やアイヌ語教育者の要請を受け、2013年と2014年に来日した。東京と北海道の各地を回り、マオリ語復興の軌跡やこの教授法の理念を紹介するとともに、アイヌ語教育者とアイヌ語教育への適応可能性を検討してきた。

## 2. 研究の目的

本研究は、マオリ語復興運動におけるマオリ語教育システムの成立過程ならびに現状を分析するとともに、マオリ語教育者を招聘し、勉強会、ワークショップを集中的に行うことで、テ・アタランギ(成人へのマオリ語教育)教授法を元にしたアイヌ語教授法の確立を目指した。

## 3. 研究の方法

マオリ語復興に関しては、テ・アタランギ協会、コーハンガ・レオ(保育園)、クラ・カウパパ・マオリ(マオリ語イメージン学校)、テ・ワーナンガ(マオリ大学)やそれに準じる教育施設の設立過程と現状を明らかにするため現地調査や文献研究を進めた。

テ・アタランギ式のアイヌ語教授法に関しては、招聘したマオリ語教育者とアイヌ語教育者の協議や実際のワークショップを行うことで、教授法の開発を試みた。テ・アタランギの教育者は、担当する学習者の学習が最も促進されやすいと考える順番に多少変更することはあるものの、1980年より実践的に作り上げられたマオリ語教育の初級版指導マニュアルTua Tahiの指導順にほぼ従っている。そこで協議による教授法策定の第一段階として、Tua Tahiの順番を参考に、アイヌ語において難易度が低く、アイヌにとって文化的に相応しいトピックを並べるという作業から始めた。さらに各単元で導入する単語の選択、各単元の教え方の訓練等を経て、実際に学習者に教えるワークショップを開いた。そのワークショップには、マオリ語教育者も学習者として参加しつつ観察し、アイヌ語教育者、学習者とともにフィードバックを与え合うという形式をとり、テ・アタランギ式のアイヌ語教授法の確立を試みた。

## 4. 研究成果

本研究の主な成果として、以下の三点を挙げる。一点目は、より複雑化するマオリ語復興、マオリ語教育に関する知見が、現地調査や文献研究により、深まったことである。二点目は、アイヌ語だけで行うテ・アタランギ式教授法の検討ならびに初級レベルの詳細な授業計画の開発とそれを補助する種々のアクティビティを開発ができたことである。三点目は、アイヌ語関係者とマオリ語関係者が、言語復興やその他の個人や民族の取り組みに関して知見を共有し合えたことである。

一点目のマオリ語復興に関しては、テ・アタランギ協会、コーハンガ・レオ(保育園)、クラ・カウパパ・マオリ(マオリ語イメージン学校)、テ・ワーナンガ(マオリ大学)やそれに準じる教育施設の設立過程と現状を明らかにするため現地調査や文献研究を進めたが、それぞれが自コミュニティのための教育を模索する中で、マオリ語教育システムを確立しただけでなく、現在も多様化し複雑化している側面を確認することができた。例えばコーハンガ・レオの誕生当初の1980年代初頭には、英語での保育園しか存在しなかったため、マオリ語衰退に危機感を

持った人々が自分たちでマオリ語イマージョンの保育施設を設立し、運営した。そこには、マオリ語母語話者であった年長者を招聘し、自らも教育者や保育者となり、自身で運営資金を提供するなどの模索的な取り組みがあった。全国的に広がったコーハンガ・レオは現在 460 あるが、コーハンガ・レオ財団から設備やカリキュラムなどの認可を受ける必要があり、そのような統制を好まないマオリ教育者たちはまた新たなマオリ語イマージョン保育を模索した。2010年代に入り、教育省と直接やり取りし認可や助成を受けることのできる自由度の高いプナ・レオという新しいイマージョン保育園ができ、現在もその数が増えている。

またクラ・カウパパ・マオリと呼ばれるマオリ語イマージョン教育の初等教育、中等教育機関も、コーハンガ・レオの卒園生がマオリ語で学べる小学校がないために、そのような学校を模索する形で始まった。現在はコーハンガ・レオと同じように政府からの助成を得て、一般の公立校と同じように全国的に存在する。さらに自部族の文化に相応しい教育を目指す教育者は、全国共通のカリキュラムで行われる学びをマオリ語のみで行うクラ・カウパパ・マオリから、部族の方言で部族の歴史や文化を中心に教育する部族イマージョン教育に移行して来ている。2012 年には、そのような部族イマージョン学校を支援する全国組織が設立され、独自の地域、部族のコミュニティに相応しい教育が確保されつつある。この他にも多様化するマオリ語教育の現状についての知見が深まった。

またアイヌ語教育においては、上述した方法で、招聘したマオリ語教育者とアイヌ語教育者が協議や学習者へのワークショップを行う中で、テ・アタアランギ教授法のアイヌ語への検討を行い、初級レベルの詳細な授業計画を開発した。この教授法の重要な点として、理念の検討はすでに行われていたが、本研究では授業計画の順序についての吟味を重ねることに焦点をおいた。アイヌにとって文化的に相応しいトピックで、初級レベルで導入すべき単語をどのように並べ、その単語が次の単元で自然に活かされるようにどのように単元を順序立てるべきか、検討を重ねた。また順序の検討の段階から、クイズネア棒をどのように提示し、どのように発話することで効果が挙げられるかといった授業の進め方も議論し、実際に学習者に教える場面を観察した。さらにマオリ語教育者、アイヌ語教育者、学習者が、実際の教育場面の後、その授業計画や進め方に関してフィードバックを与えることで、さらなる授業計画の修正を図ることができた。また開発された各単元の単語を定着し実際に発話できるようにするため種々のアクティビティも同時に開発することができた。

上述のような成果を上げるために、マオリ語教育者を日本に招聘してワークショップを行うこと、アイヌ語関係者とニュージーランドを訪れて現地調査をすることは不可欠であった。日本でのワークショップにはたくさんのアイヌ語教育者や学習者が参加され、またニュージーランドでも多くのマオリ語復興関係者と話し合いがあった。言語復興やその他の個人や民族の取り組みに関して知見を共有し合えたことは大きな成果であり、以前から続けられているアイヌとマオリの先住民族文化復興の繋がりに感謝するとともに、その繋がりの継続に、本研究が少しでも寄与できたのであれば、それ自体も大きな成果だと考える。

## 5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

Takayuki Okazaki Ainu language shift In Patrick Heinrich & Yumiko Ohara (Eds.), *Routledge Handbook of Japanese Sociolinguistics*, 査読なし, 354-369, 2019.

DOI:10.4324/9781315213378

Takayuki Okazaki Developing critical awareness of language use and power in a university class in Japan. *The Journal of Engaged Pedagogy*, 18(1), 査読あり, 155-167, 2019.

〔学会発表〕(計 2 件)

Takayuki Okazaki Teaching to raise critical awareness on language and power: Deconstructing the standardization of Japanese language, Decolonizing Conference, University of Toronto OISE, 査読あり, 2018.

Takayuki Okazaki Ainu Language Revitalization: Relationship to Te Ataarangi, Poukorero Conference on Language Revitalisation, New Plymouth, 査読なし, 2016.

〔図書〕(計 2 件)

岡崎享恭、「英語教育と先住民族言語復興—マオリ語、アイヌ語を中心に」(杉野俊子(監)、田中富士美、波多野一真(編))「言語と教育 - 葛藤から第三の道へ - 」, 査読なし, 第 6 章, 125-140, 2017.

Shimada, A., Teeter, J., & Okazaki, T. “Education and Spaces of, for, and by Ainu: Initiatives Born Out of the 2013 Aotearoa Ainumosir Exchange Program” Shimada, A., Teeter, J., & Okazaki, T. In R. Miller, T. Ottman, H. Palmer, Z. Richie & D. Warchulski (Eds.), *Peace and Welfare in the Global and Local Community*, iUniverse, 査読なし, 43-58, 2016.

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等